

# 北海道において

## これから伸びるりんごの品種と更新

北海道中央農業試験場 細貝節夫

### はじめに

りんごは北海道で栽培されている果樹のうち最も栽培面積も多く収益も安定した果

	計	その他	ふじ	ゴールデンゴデ	陸奥	祝	旭	ドードーレッド	レッドシヤス系	デリア
道南	100	15	5	10	5	5	—	10	50	—
道央	100	5	—	—	10	—	15	20	50	—
道北	100	20	—	—	—	—	30	30	20	—

注 道南—後志以南。道央—石狩, 空知。道北—上川以北。

樹である。しかしながら同じりんごであっても品種によってその収益性に非常に大きな差があり、特に最近その差がはなはだしくなってきた。例えばスターキングなどデリシヤス系では一〇万円以上一〇万円以上の所得をあげることが普通であるが国

光、紅玉ではその半分にも達しない状態である。

このように品種による収益性に大きな差があるので品種の選択と更新は非常に重要なことがらである。

### 一 これからの品種の配合割案

品種の選択に当っては、消費者の嗜好に適したものを、栽培のしやすいもの、販売期間の長いもの、更はその配合を考える場合には採取等の労力が一時的に集中しないものなどが重要な着眼点となる。

今北海道の場合を考えると第一表のようになる。

なおこれを一応の目安と考えると道央でも道南に近い考えをとり入れるところ、道北でも道央に近い考えをとり入れるところがあつてもよいであらう。

### 二 主要品種の特性

#### デリシヤス系

当面この系統の中で主力となるのはスターキングである。スターキングが昭和三十

八年に東京で行なわれた輸入三〇周年記念コンテストで、道産のものが最高の入賞率を示したことは本道りんごの将来に輝かしい希望を与えてくれたこととして記憶に新しいことである。

デリシヤス系にはこのスターキングを含めてアメリカでは現在約八六種の系統が知られている。これらの系統の特徴とされるものは、全面着色であるとか縞状であるとか、明るい色であるとか、暗い色であるとかの差によるものと更に着色期の早晩)樹の性質がスパータイプ(短果枝型、)といつて芽の着成が非常に密になり枝の徒長しないものなどが分類のものとなっている。

現在日本ではスターキングとリチャードの二種が代表的であり、とくに前者はデリシヤス系の代表とされ(最近ではおそらく九〇%以上であらう)ている。ところがこのスターキングは非常に変異が多く、前述の八六系統に分類されたものうち、スターキングからわかれたものが実に四九系統に達している。なおリチャードから二系統、普通デリから二九系統シュットウエルから二系統である。

このようにスターキングから更に良いものが多く発見されているのであるが一方それだけ悪いものでも率も多いのである。いわゆる先租がえりというとか、着色不良の系統のものが非常に多いわけである。

このことは現在我が国で栽培されているスターキングの内にもすでに非常に多くの系統がわかれているということがいえるのである。であるから一口にスターキングと

いってもその中から着色時期の早いもの、着色程度のよいもの等の優良系統を選び母本として用いることが必要である。なお先租がえりが少ないという点ではむしろリチャードの方が安心であるともいえるが、現在日本では濃厚な着色が好まれているのでリチャードでは色が少しものたりないといわれるのでないかと思われる。

更に最近のものとして着色の早いトップレッドデリシヤス。スタークリムソンデリシヤス、ハイアーリーレッドデリシヤス、ロイヤルレッドデリシヤス、レッドキングデリシヤスなどがあるが、熟期は変りないのであるが着色が早いため過熟によって生ずるアンコ病(インターナルブラウニング)といい、貯蔵中の果肉が心に近い部分から褐色になりすすむと腐敗する生理病害で、これと似たもので種子の部分から腐ってくる心カビとは異なる)の被害を少なくすることができるといわれる。しかしこのアンコ病は北海道で発生は府県のもの程多くない。

更にスパータイプといわれるものでは、ウエルスパ、レッドスパ、スタークリムソンなどがあるが、これは芽が非常に密につき、樹も矮性(普通のものの七、八割位)で初期収量も多いので、これからは、スパータイプのものを栽培することをすすめたい。

なおこのスパータイプの枝変わりも、道内で昨年から数本発見しており、これらの内からよいものがでるかと思われ目下集めて検討している。

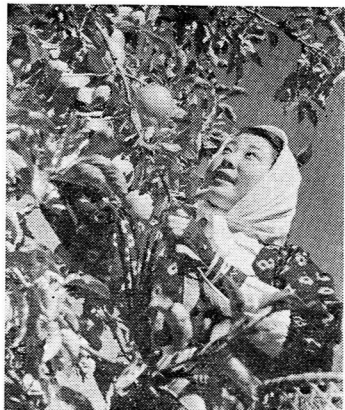
高接病のヴァイラスについて

次に問題となるのは高接病のヴァイラスである。これは有毒の穂を接木する高接でなく、苗木でも台木によって、根の部分にネクロシスといわれる褐色になった組織の死んだ部分ができるのである。これは症状がすすむと枯死する。これはとくにマルバカイドウ台についだものに出やすくミツバカイドウ台にもでる。

ところがデリシヤス系に多い粗皮病は、マンガン過剰症ともいわれ他の原因によるものではあるが、台木ではマルバカイドウに接がれたものが出がたいことが知られている。ところが高接病のヴァイラスにはマルバカイドウが弱いので、この両面から問題を解決するには、ヴァイラスのない穂をとりマルバ台に接いだものを用いることがよい。

現在までのところスターキング、ゴールドには無毒のものがでていたので検定された無毒のものを用いるべきである。

なおスパータタイプのデリシヤスのうちレツドスパータは無毒であるが、ウエルスパータはヴァイラスがあるのでマルバ台は用い



れない。

### レツドゴールド

中生種として有望であり、寒いところでは貯蔵力もあるので増殖したい品種である。この品種は現在のところ高接病のヴァイラスを持たない母本が知られていないのでマルバ台は用いるべきでないし、ミツバ台のものでもかなり高い割合で発病している苗があるから注意しなければならぬ。道でさきに優良母樹と指定したのもでもヴァイラスを消毒している。このことはさきに青森県で県のりんご課が指定した優良母樹も一〇〇％消毒していることが明らかにされており、無毒の系統の発見が急務である。

なお道農試で輸入した栄養系台木（通称矮性台木）は、消毒した穂をついても発病しないので今後利用されよう。なおレツドゴールドは高接病のヴァイラスをもっているので高接は非常に危険であるからできるだけ高接による更新は行なわず、苗木をうえて更新すべきである。

### 陸奥

貯蔵後の品質が非常によいこと及び無袋ができる。結実過多となることがないので摘果労力が少なくよいこと、玉のびがよいので収量はかなり多く、その割合に採取労力を要しないことなどから青りんごであるが今後増殖してよい品種と思われる。

### ふじ

青森県では貯蔵品種としては従来のものがない良質の品質であり、そのため最近非常に増殖の機運にある。北海道では札幌位まではなんとかよいが江部乙では未熟で、

かつ玉のびも悪いので北部では将来性はなしいといえよう。要するにデリシヤス系の貯蔵のきくところではふじは不要であり、デリシヤス系の貯蔵がまかぬところはふじはかなり栽培してよいものと思われる。

### タイズマンレツド

英国で発表された品種で旭とウオセスター・ペアメンの交配種である。わが国では、昭和三十八年道立農試の赤羽博士がカナダより導入したもので、昭和四十年江部乙りんご試験地で始めて結実した。

昨年の結実状態からみると、大体旭の二週間位前で九月の上、中旬に採取される。果実は非常に鮮やかな濃紅色となり外観はよい。又採取当時より旭のように酸味はなく、香りがあり、果実の大きさも旭並であり中生種としてはかなり有望である。高接のヴァイラスがあるので高接はできない。

なお、この品種は本来が中生種であるから大栽培はできないが、旭の一部におきかえられる時代がくるかもしれない。

### 旭

北海道中北部の代表種であり、今後ともわらないであろう。とくに最近貯蔵後の価格がのびており、この品種の特性が今にしてようやく消費者に理解されてきたものの様である。一方青森をはじめ府県では着色、果実品質の問題から旭をいかにして一日も早くなくするかということが目標とされているだけに本道の旭の将来性は大きいと思われる。

## 三 品種の更新

品種の更新には高接によるものと苗木に

よるものがある。

高接による方法は結果が早いのでよく行なわれるが高接病のおそれがあるので接穂はヴァイラス無毒のものを用いる。

接ぐ場合は一樹当りの接木箇所をできるだけ多くし、樹全体の更新を一气にはかることである。接木後接穂から発育した枝をできるだけ早く結果枝にするため、誘引、捻枝などの手を入れることが望ましい。

苗木による場合は、園地が老木で欠木が多く収量の非常に少ない場合には、経営上ゆるせる範囲内において皆伐更新を行なうことが望ましい。皆伐後、古い樹根をよく整理し、石灰、有機質等を充分に入れ土地改良しながら、苗木を植えることが望ましい。この際、密植によって初期収量をあげること考えてもよい。矮性台が普及すると密植栽培もかなり可能になると思われるが、現在のところ剪定に注意すればゴールド・紅玉等は一〇坪当り四八本の密植は可能である。しかしデリシヤス系はその樹性と、密植下における剪定方法が技術的に確立されていないので現在のところ困難である。

現在生産が普通にあがっている園でも、樹令が二〇年位で樹がこみ合っている園では間伐しながらその間に新しい品種の苗をうる間伐更新をすすめるべきであり、老衰とまではいかないが盛りをすぎた園では樹の間に規則的に苗木を植える補植更新を行なうべきである。

従来からの主産地においても常に苗木を準備し、園地の若返りをはかることを念頭においていただきたい。

（道立中央農試果樹科長）